

## 2章『戦うアイドル』6

その美青年は、会場中の注目を集める中、ツカツカと舞台へと近づきながら、

「エントリーシートに住所と学校名を載せなかったのは、のっぴきならないある理由がありまして……申し訳ありませんでした」と深く一礼した。

「なんだ貴様？ 何者だ？」

稲垣がキツく問い詰める。

「失礼。私は、あみた……」

美青年は、自分の名前を口にしたが、途中で止め、壇上のカノンとセシルを見た。

「ねえ、今、あの人、あみたって言いかけたよね」。セシルがカノンに耳打ちしている。

「うん。あみたんの関係者か

# あみたん娘

## The NOVEL

24

酒井 直行

「な？」。カノンが訝しげに目を細め、美青年を見つめている。「なんだ。自分の名前さえ名乗れないのか」。稲垣が鼻で笑った。

美青年は、カノンとセシルを

さんね。まさか犬嫌いの三鷹瞬とか言い出すんじゃないだろうな」

「いえ。瞬ではありませんし、犬は大好きです」

稲垣のギャグは、古すぎて美青年には通じなかったようだ。

「一体、何を言ってるの？」

カノンたちも不思議そうに首を傾げた。

「とにかく彼女たちは正真正銘市

内在住者であります。私が保証します。詳細は後ほど」

「だからさ、貴様は何者なんだよ」。稲垣が苛ついて叫ぶ。

「私は、2人のマネージャー

です」。三鷹はそう言い切った。

これに驚いたのはカノンとセシルだった。自分たちにマネージャーがいたなんて、もちろん初耳だ。

「ねえ、どうということ？」。

カノンが不安そうにセシルの袖をギュッとつかんだ。

「分からない。でもあの人、私たちのピンチを救ってくれそうじゃない？」。セシルがカノンの手に自分の手を重ね合わせた。

「今後のことやもろもろの手続きもありますから、あみたん娘の2人とマネージャーさんはこの後、別室にお越しただくということだ」。家祭がその場を取りおさめた。

カノンとセシルは、啞然とする稲垣を尻目に、三鷹と名乗る謎の美青年とともに別室に向かった。



キャラクター原案 松原 秀典  
イラスト 那智 泉見

見つめながら、何事かを考えこんでいたが、やおら笑顔になって、改めて自己紹介する。

「失礼。あ……みたか、と申すものです」

「あ、みたか？ ああ、三鷹

です」。三鷹はそう言い切った。